

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K11	氏名	中森 千穂
研究主題 —副主題—	学習への「好き」な気持ちを高める手だての導入と活用 —夢中になって活動に取り組む図画工作科の実践をもとに—		
所属校	大田区立千鳥小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>小学校の授業において図画工作科（以下、図工とする）は常に児童の好きな教科の上位にある。しかし、低学年から高学年、中学生になるにつれ、好きな気持ちが少なくなっていく。それは図工や美術の学習指導要領が改訂される度に授業時数が減少していることと関わりがあると考え。好きな教科2位であった美術は、時数が激減した後の平成15年調査で、好きな教科11位になっている。</p> <p>一方、活動に夢中になっていた児童の割合が小学校と比較して中学校では減少している。</p> <p>このことから、授業時数の増減は、活動に夢中になることや学習への好きな気持ちの変化と関係していると思われるかもしれない。しかし、限られた時間を有効に活用し、夢中になれる質の高い学習を展開することによって、児童の学習への好きな気持ちが高まると考える。</p> <p>私たちは夢中になることはあまりないと考えるかもしれない。しかし、深さに違いはあるものの、私たちは日常生活のあらゆる場面で夢中になっている。このことをフロー体験と名付けたのがM・チクセントミハイであり、夢中になる、つまり「一つの行為に没入しているときに感じる感覚であり、それは深い楽しさや喜びをとまなうもの」としている。フローとは人間が自分の能力をいっぱいを使って機能しているときに得られる感覚であり、それは、日常生活において精神的健康を維持・促進していくための一つの指針となり得る経験と説明している。人はフロー状態のとき、現実と関係なく時間の感覚が様々に変化する。したがって、授業時間に関係なく児童も夢中になる体験（フロー体験）をし得ることになる。</p> <p>そこで、夢中になる体験（フロー体験）を通じて児童はその時の気持ちを表すと「楽しい」になり、それらが蓄積すると「好き」な気持ちが今まで以上に向上すると仮定する。</p> <p>本研究では、まず図工の授業が「好き」という気持ちと夢中になる体験の相関性を探る。そして、そのことを生かし、関連の特徴や特に示唆深いところを引き出して授業の分析や構想をする。次いで夢中になる活動の効果的な実践を行い、その成果と課題を具体的な学びの姿から提案することを目的とする。</p>
II 研究の方法	<p>上記の目的を達成するために本研究の手順と方法及び経過をイメージして右に示す。</p> <p>まず、図にあるように図工を取り巻く問題やそれに関わる現状を様々な検討する。これは「I 研究の目的」にあるとおりである。次いで、夢中になる体験の先行実践や文献の研究をする。その後質問紙調査より、夢中になること（フロー体験）と好きという気持ちとの相関性について調査、分析する。その上で、質問紙調査や先行実践・文献の研究の分析からフローを体験する図工の授業を構築し、好きな気持ちの向上や維持の相関を実証する。最後に、夢中になる活動を体験する意味を考えることを通して、今後の図工の発展や課題を検討する。</p> <div style="text-align: right;"> <pre> graph TD A["① テーマに関する先行実践・文献の研究と基本的な考えの構築"] --> B["② 図画工作科における質問紙調査 1 事前調査 2 質問項目の修正と決定・準備 3 本調査 小学校2,5年生 中学校1年生 保護者"] B --> C["③ 方略を生かした実践の構想"] C --> D["④ フロー体験に導く授業実践 小学校2,5年生"] D --> E["⑤ 実践の成果・課題と研究全体の省察"] </pre> </div>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>(1) 質問紙調査による研究</p> <p>① 質問紙調査の実施 フローに関する項目が他の項目より「あてはまる」と「わりとあてはまる」の割合が高いことが分かる。一方、普段の家庭生活の中で図工に関する経験を問うた項目は、「当てはまらない」「あまりあてはまらない」とした回答が多かった。</p> <p>② 質問紙調査の結果で分析したこと</p> <p>a) 「図工の勉強は、全体的に好きだ」とフロー体験に関する項目の相関を分析した結果、正の相関が認められた。</p> <p>b) 「好き」と「嫌い」の2グループによるフロー体験の平均値 図工が好きな児童・生徒は授業中にフロー体験をしている割合が図工を嫌いな児童・生徒より多いことが分かった。</p> <p>c) 自由記述における頻出単語の傾向 「自分の思ったとおりに作品が作れた」ことで「楽しかった」とあり、図工が好きだと答えた児童・生徒に多く見られた。</p> <p>(2) 実践研究</p> <p>① 実践の構想とその枠組み 分析の結果、図工が好きであることと、時間を忘れて夢中になる体験は関係性があることが分かった。そこで、そのような体験をつくりだす図工の条件と方略を質問紙調査の示唆をもとに構築した。それをもとに授業に夢中になり、その結果図工が好きな気持ちの向上を図る検証授業を行った。</p> <p>② 夢中になる活動のための条件と方略の設定</p> <p>条件1 学習課題の設定 条件2 学習方法と学習形態の工夫 条件3 学習方法の示し方の工夫 条件4 安心・安全の場の共有</p> <p>③検証授業の考察</p> <p>a) 第2学年 1回目と最終回のフロー体験の質に変化はあったが、2回とも高いフロー状態にあったことがわかる。</p> <p>b) 第5学年 各回のフロー体験の平均値は、それぞれの値に差があるという結果が出た。また、今までより更に図工を好きになった児童が多かった。一方、今まで好きだった児童がより好きになっている割合が高く、図工を好きでない児童に対しての更なる方略を講ずる必要がある。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ フロー体験を重ねる中で、学ぶことや活動することに喜びを感じ、教科全体への好きな気持ちが向上することが実証された。 ○ フロー体験を経験するにつれ、児童は自己肯定感が高くなることが確認できた。 ○ 学年が上がるにつれ実態に応じた負荷を与えることで、質の高いフロー体験に導いた。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 苦手意識のある児童のために題材選定や学習活動、方略を一層工夫する。 ○ 全ての題材で方略が有効であるか不明瞭であり、継続して検証していく。 ○ 他教科等を含め、方略を一般化させるため、共有性や整合性を検討する。 <p>まとめ</p> <p>児童が夢中になる体験（フロー体験）によって教科を好きになることは、自己肯定感や学習に対する意欲が向上する上で有効であった。また、本研究は図工に限らず、他教科でも活用できると考える。今後も学びを生涯学習に結び付けるための視点を持ち、検証していきたい。</p>

